



吉川英治

三國志

五

の大自然と治乱興亡果てない大陸の歴史が育くんだ複雑な中国
心。魏蜀呉三國の覇權と政治の妙に学ぶ生甲斐と身の処し方。

六興出版

吉川英治

三国志

第五卷 孔明の巻

三 国 志 第 5 卷 (全 10 卷)

平成 2 年 2 月 20 日 初版印刷

平成 2 年 2 月 25 日 初版発行

著 者 吉 川 英 治

発行者 賀 來 壽 一

発行所 株式会社 六 興 出 版

〒112 東京都文京区水道 2 - 9 - 2

電話 03 (943) 3431 (代表)

振替 東京1-92448

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©1990 Fumiko Yoshikawa. Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

ISBN 4-8453-0215-2 C0093

目

次

十 面 埋 伏	溯 卷 く 黄 河	霹 靂 車	孫 権 立 つ	于 吉 仙 人	兄 弟 再 会	古 城 窟	の ら 息 子	五 関 突 破	関 羽 千 里 行
104	92	79	66	55	44	35	26	15	3

泥	魚	115
自	壊	闘
争	124	
邯	鄆	131
野	に真人あり	137
遼	西・遼東	146
食	客	153
檀	溪を跳ぶ	162
琴	を弾く高士	170
吟	嘯浪士	178
軍	師の鞭	185

徐庶とその母……………191

立つ鳥の声……………200

諸葛氏一家……………208

臥龍の岡……………220

孔明を訪う……………227

雪千丈……………238

立春大吉……………249

孔明の巻

関羽千里行

一

時刻毎に見廻りに来る巡邏の一隊であろう。

明け方、まだ白い残月がある頃、いつものように府城、官衙の辻々をめぐって、やがて大きな溝渠に沿い、内院の前までかかって来ると、ふいに巡邏のひとりが大声で言った。

「ひどく早いなあ。もう内院の門が開いとるが」

すると、他の一名がまた、

「はて。今朝はまた、いやに隈なく箒目立てて、きれいに掃き浄めてあるじゃないか」

「いぶかしいぞ」

「なにが」

「奥の中門も開いている。番小屋には誰もいない。どこにもまるで人氣がない」

つかつか門内へ入っていたのが、手を振って呶鳴った。

「これやあ変だ！ まるで空家だよ！」

それから騒ぎ出して、巡邏たちは奥まった苑内まで立ち入ってみた。

するとそこに、十人の美人が啞のように立っていた。

「どうしたのだ？ ここの二夫人や召使いたちは」

巡邏がたずねると、美姫のひとりが、黙って北の方を指さした。

この十美人は、いつか曹操から関羽へ贈り、関羽はそれをすぐ二夫人の側仕えに献上してしまい、以来、そのまま内院に召使われていた者たちであった。関羽は曹操から贈られた珍貴財宝は、一物も手に触れなかったが、この十美人もまた他の金銀緞匹と同視して、置き残して去ったものである。

——その朝、曹操は、虫が知らせたか、常より早目に起きて、諸将を閣へ招き、何事か凝議していた。

そこへ、巡邏からの注進が聞こえたのである。

「——寿亭侯の印をはじめ、金銀緞匹の類、すべてを庫内に封じて留め置き、内室には十美人をのこし、その余の召使い二十余人、すべて関羽と共に、二夫人を車へさせて、夜明け前に、北門より立ち退いた由でございます」

こう聞いて、満座、早朝から興をさました。猿臂將軍蔡陽は言った。

「追手の役、それがしが承わらん。関羽とて、何ほどのことやあらう。兵三千を賜わらば、即刻、召し捕らえて参りまする」

曹操は、侍臣のさし出した関羽の遺書をひらいて、黙然と読んでいたが、

「いや待て。——われにこそ無情いが、やはり関羽は真の大丈夫である。来ること明白、去ることも明白。まことに天下の義士らしい進退だ。——其方どうも、良い手本にせよ」

蔡陽は、赤面して、列後に沈黙した。

すると程昱は、彼に代わって、

「関羽には三つの罪があります。丞相の御寛大は、かえって味方の諸將に不平をいだかせましよう」

と、面を冒して言った。

「程昱。なぜ、関羽の罪とは何をさすか」

「一、忘恩の罪。二、無断退去の罪。三、河北の使いと密かに密書を交わせる罪——」

「いやいや、関羽は初めから予に、三カ条の約束を求めておる。それを約しながら強いて履行を避けたのは、かくいう曹操であつて、彼ではない」

「でも今——みすみす彼が河北へ走るのを見がしては、後日の大患、虎を野へ放つも同様ではありませぬか」

「さりとて、追討ちかけて、彼を殺せば、天下のみな曹操の不信を鳴らすであらう。——如かず！如かず！人各々その主ありだ。このうちは彼の心の赴くまま故主の許へ帰らせてやろう……。追うな、追うな。追討ち蒐けてはならんぞ」

最後のことは、曹操が曹操自身へ戒めているように聞こえた。彼のひとみは、そういうあいだも、北面したまま凝と北の空を見つめていた。

二

ついに、関羽は去った！

自分をすてて玄德の許へ帰った！

辛いかな大丈夫の愛。——恋ならぬ男と男との義恋。

「……ああ、生涯もう二度と、ああいう真の義士と語れないかもしれない」

憎悪。そんなものは今、曹操の胸には、みじんもなかった。

来るも明白、去ることも明白な関羽のきれいな行動にたいして、そんな小人の怒りは抱こうとしても抱けなかったのである。

「……………」

けれど彼の淋しげな眸は、北の空を見まもったま

ま、如何ともなし難かった。涙々、頬に白いすじを描いた。睫毛は、胸中の苦悶をしばだたいた。

諸臣みな、彼の面を仰ぎ得なかった。しかし程昱、蔡陽の輩は、

「いま関羽を無事に国外へ出しては、後日、かならず悔い悩むことが起こるに相違ない。殺すのは今のうちだ。今の一刻を逸しては……」

と、ひそかに腕を扼し、足ずりして、曹操の寛大をもどかしがっていた。

曹操はやがて立ち上がった。

そして、四辺の諸大将に言った。

「関羽の出走は、あくまで義にそむいてはいない。彼は七度も暇を乞いに府門を訪れているが、予が避客牌をかけて門を閉じていた為、ついに書を遺して立ち去ったのだ。大人の非礼はかえて曹操にある。生涯、彼の心底に、曹操は気心の小さいものよと嗤われているのは心苦しい。……まだ、途も遠くへは距たるまい。追いついて、彼にも我にも、後々まで

の思い出のよい信義の別れを告げよう。——張遼、供をせい！」

やにわに彼は闇を降り、駒をよび寄せて、府門から馳け出した。

張遼は、曹操から早口にいつけられて路用の金銀と、一襲の袍衣とを、あわただしく持つて、すぐ後から鞭を打った。

「……わからん。……実にあの御方の心理はわからん」

闇上にとり残された諸臣はみな呆つ氣にとられていたが、程昱、蔡陽の輩はわけても茫然、つぶやいていた。

× × ×

山はところどころ紅葉して、郊外の水や道には、翻々、枯葉が舞っていた。

赤兎馬はよく肥えていた。秋はまさに更けている。

「……はて。呼ぶものは誰か？」

関羽は、駒をとめた。

「……おおういっ」

という声——。秋風のあいだに。

「さては！ 追手の勢」

関羽は、かねて期したる事と、あわてもせず、すぐ夫人の車のそばへ行った。

「扈従の人々。おのおのは御車を推して先へ落ちよ。関羽一人はここにあつて路傍の妨げを取り除いたうえ、悠々と、後から参れば——」

と、二夫人を驚かさぬように、わざとことば柔らかに言つて駒を返した。

遠くから彼を呼びながら馳けて来たのは、張遼であつた。張遼はひつ返して来る関羽の姿を見ると、

「雲長。待ちたまえ」と、更に駒を寄せた。

関羽は、こと笑つて、

「わが字を呼ぶ人は、其許のほかにないと思つていたが、やはり其許であつた。待つことかくの如く神妙であるが、いかに御辺を向けられても、関羽はまだ御辺の手にかかつて生捕られるわけには参らん。

さてきて辛き御命をうけて来られたもの哉——」

と、はや小脇の偃月刀を持ち直して身がまえた。

「否、否、疑うをやめ給え」と、張遼はあわてて弁明した。

「身に甲を着す、手に武具を携えず——拙者のこれへ参ったのは、決して、あなたを召し捕らんが為ではない。やがて後より丞相が御自身でこれに來れる故、その前触れに來たのでござる。曹丞相の見えられるまで、暫しこれにてお待ちねがいたい」

三

「なに。曹丞相みずからこれへ参るといわれるか」

「いかにも、追ッつけこれへお見えになろう」

「はて、大仰な」

関羽は、何思ったか、駒をひつ返して霸陵橋の中ほどに突つ立った。

張遼は、それを見て、関羽が自分のことばを信じないのを知った。

彼が、狭い橋上のまん中に立ち塞がったのは、大

勢を防ごうとする構えである。——道路では四面から囲まれる惧れがあるからだ。

「いや。やがてわからう」

張遼は、敢て、彼の誤解に弁明を努めなかった。

まもなく、すぐあとから曹操はわずか六、七騎の腹心のみを従えて馳けて來た。

それは、許褚、徐晃、于禁、李典などの錚々たる将星ばかりだったが、すべて甲冑を着けず、佩劍のほかは、ものものしい武器を携えず、極めて、平和な装いを揃えていた。

関羽は、霸陵橋のうえからそれをながめて、

「——さては、われを召し捕らんためではなかったか。張遼の言は、真実だったか」

と、やや面の色をやわらげたが、それにしても、曹操自身が、何故にこれへ來たのか、なお怪しみは解けない容子であった。

——と、曹操は。

はやくも駒を橋畔まで馳け寄せて来て、しずかに声をかけた。

「オオ羽將軍。——あわただしい、御出立ではないか。さりとてあまりに名残惜しい。何とてそう路を急ぎ給うのか」

関羽は、聞くと、馬上のまま慇懃に一礼して、

「その以前、それがしと丞相との間には三つの御誓約を交わしてある。いま、故主玄德事、河北にありと伝え聞く。——幸いに許容し給はんことを」

「惜しいかな。君と予との交わりの日のあまりにも短かりしことよ。——予も、天下の宰相たり、決して昔日の約束を違えんなどとは考えていない。……しかし、しかし、あまりにも御滞留が短かったような心地がする」

「鴻恩、いつの日か忘れましよう。さりながら今、故主の所在を知りつつ、安閑と無為の日を過ごして、丞相の温情にあまえているのも心ぐるしく……ついに去らんの意を決して、七度まで府門をお訪ねしま

したが、つねに門は各々閉ざして、むなしく立ち帰るしかありませんでした。お暇も乞わずに、早々旅へ急いだ罪はどうか御寛容ねがいたい」

「いやいや、あらかじめ君の訪れを知って、牌をかけたのは予の科である。——否、自分の小心の爲せる業と明らかに告白する。いま自身でこれへ追つて来たのは、その小心をみずから恥じたからである」
「なんの、なんの、丞相の寛闊な度量は、何ものにも、較べるものではありません。誰よりも、それがしが深く知っておるつもりです」

「本望である。將軍がそう感じてくれれば、それで本望というもの。別れたあとの心地も潔い。……おお、張遼、あれを」

と、彼はうしろを顧みて、かねて用意させて来た路用の金銀を、餞別として、関羽に贈った。

が関羽は、容易にうけとらなかつた。

「滞府中には、あなたから充分な、お賄いをいただいておるし、この後といえども、流寓落魄貧しきに

は馴なれています。どうかそれは諸軍の兵に頒わけてやつてください」

しかし曹操も、また、

「それでは、せっかくの予よの志こころざしもすべて空むなしい氣がされる。今さら、わずかな路銀などが、君の節操を傷つけもしまい。君自身はどんな困窮こんきゆうにも耐えられようが、君の仕つかえる二夫人に衣食の困苦をかけるのは傷いたましい。曹操の情として忍しのび難がたいところである。君が受けるのを潔しとしないならば、二夫人へ路用の餞別として、献けんじてもらいたい」と強たつて言つた。

四

関羽は、ふと、眼をしばだいたいた。二夫人の境遇きやうぐうに考え及ぶと、すぐ断腸だんちやうの思おもいがわくらしいのである。

「御芳志ごほうしのもの、二夫人へと仰おほせあるなら、ありがたく収おさめて、お取り次ぎいたそう。——長々お世話

にあずかった上、些少さしうの功勞をのこして、いま流別るべつの日に会う。……他日、萍水ひょうすいふたび巡めぐり遇あう日も来れば、べつにかならず、余恩をお報い申すでござろう」

彼のことばに、曹操も満足まんぞくを面おもてにあらわして、

「いや、いや、君のような純忠の士を、幾月か都へ留とどめておいただけでも、都の士風はたしかに良化りやうかされた。また曹操も、どれほど君から学ぶところが多かったか知れぬ。——ただ君と予との因縁いんねん薄うすうして、いま人生の中道ちゆうどうに袂たもとを別わかつ。——これは淋さびしいことにちがいないが、考え方に依よつては、人生のおもしろさもまたこの不如意ふによういのうちにある」

と、まず張遼の手から路銀を贈らせ、なお後ろの一将を顧みて、持たせて来た一領の錦の袍衣ひたれを取り寄せ、それを関羽に餞別はんわけせん——とこう言つた。

「秋も深いし、これからの山道や渡河の旅も、いとど寒く相成あひなろう。……これは曹操が、君の芳魂ほうこんをつつんでもらいたいたい為、わざわざ携もえて来た粗衣あらひに過

ぎんが、どうか旅衣として、雨露のしのぎに着ても
らいたい。これくらいのは事は君がうけても誰も君の
節操を疑いもいたすまい」

錦の袍を持った大將は、直ちに馬を下りて、つか
つかと覇陵橋の中ほどへすすみ、関羽の駒のまえに
ひざまずいて、恭しく錦袍を捧げた。

「かたじけない」

関羽はそこから目礼を送ったが、その眼ざしには、
もし何かの謀略でもありはしまいかとなお充分警戒
しているふうが見えた。

「——せっかくの御饒別、さらば賜袍の恩をこうむ
るでござろう」

そういうと、関羽は、小脇にしていた偃月の青龍
刀をさしのべてその薙刀形の刃さきに、錦の袍を引
っかけ、ひらりと肩に打ちかけると、

「おさらば」と、ただ一声のこして、たちまち北の
方へ駿足赤兎馬を早めて立ち去ってしまった。

「見よ。あの武者ぶりの良さを——」

と、曹操は、惚々と見送っていたが、つき従う李
典、于禁、許褚などは、口を極めて、怒りながら、

「なんたる傲慢」

「恩賜の袍を刀のさきで受けるとは」

「丞相の御恩につけあがって、すきな真似をしちら
しておる」

「今だつ。——あれあれ、まだ彼方に姿は見える。

追いかけて！……」

と、あわや駒首をそろえて、馳け出そうとした。

曹操は、一同をなだめて、

「むりもない事だ、関羽の身になってみれば、——

いかに武装はしていなくとも、こちらにはわが麾下の
錚々たる者のみ二十人もいるのに、彼は単騎、ただ
ひとりではないか。あれくらいな要心はゆるしてや
るべきである——」

そしてすぐ許都へ帰って行つたが、その途方も左
右の諸大將にむかつて、

「敵たると味方たるとを問わず、武人の薰しい心操